

2022 年度さくらねこ無料不妊手術事業

多頭飼育救済(行政枠)アンケート 集計結果

さくらねこ無料不妊手術事業とは

どうぶつ基金の「さくらねこ無料不妊手術事業」は野良猫や多頭飼育の猫に対して不妊手術を行い、猫への苦情や殺処分の減少に寄与する活動です。

2022 年度は 3,546 名の個人(一般枠)、47 団体、298 の行政と協働し、62,128 頭のさくらねこ無料不妊手術を実施しました。

一般枠での無料不妊手術実施数 25,538 頭

団体枠での無料不妊手術実施数 3,096 頭

行政枠での無料不妊手術実施数 32,243 頭

多頭飼育救済枠(行政枠)での無料不妊手術実施数 1,251 頭(犬は申請なし)

無料不妊手術実施頭数 総合計 : 62,128 頭

1. アンケート概要

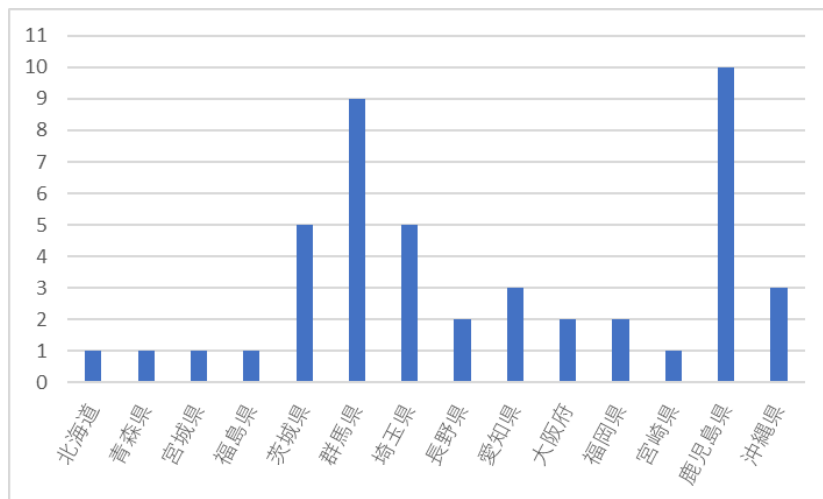
2022 年度に「さくらねこ無料不妊手術事業」に多頭飼育崩壊現場への不妊手術支援を申請し、事業を完了した協働ボランティア(行政枠)に事後調査アンケートを実施しました。

行政枠とは: 行政(地方公共団体)および準ずる団体

公園管理事務局等、行政が管理する施設の管理者や、大学等教育機関も行政枠の対象

- 2022 年度さくらねこ無料不妊手術 多頭飼育救済実施数 68 件
- アンケート有効回答数 46 件

2. 都道府県別件数



鹿児島県の 10 件が最多です。昨年度、鹿児島からの申請は 3 件でしたが 3 倍以上となりました。

次いで群馬県、茨城県、埼玉県と続き、2022 年度も関東圏からの申請が全体の約 40%となっています。

※アンケート回答 46 行政の都道府県別

3. 申請を行った担当部署

多頭飼育救済を申請した行政の担当部署	票数	%
環境・衛生系(主に犬猫の問題を担当)	46	100%
福祉系(生活保護など人間の問題を担当)	0	0%
その他	0	0%

全体の実施件数は 68 件で、2021 年度の 84 件から 16 件減少しました。それでも 1 カ月に 6 件の多頭飼育救済支援を行ったこととなります。

環境・衛生系部署からの申請が多数を占める傾向は変わりません。しかし、情報提供や飼い主・飼い主家族のサポート等で福祉系部署と協働している案件は多く、部署を超えた協力体制の構築を目指す行政も出てきています。

4. 配布チケット数について

2022 年度に配布を受けたチケット数	票数	%
1～10	13	28%
11～20	17	37%
21～30	7	15%
31～50	8	17%
51～70	1	2%
71 以上	0	0%

配布されたチケットの使用率	票数	%
100%	27	59%
80～99%	8	17%
60～79%	9	20%
40～59%	2	4%
20～39%	0	0%
0～19%	0	0%

59%の団体が 100%の使用率、96%の団体が 60%以上の使用率でした。

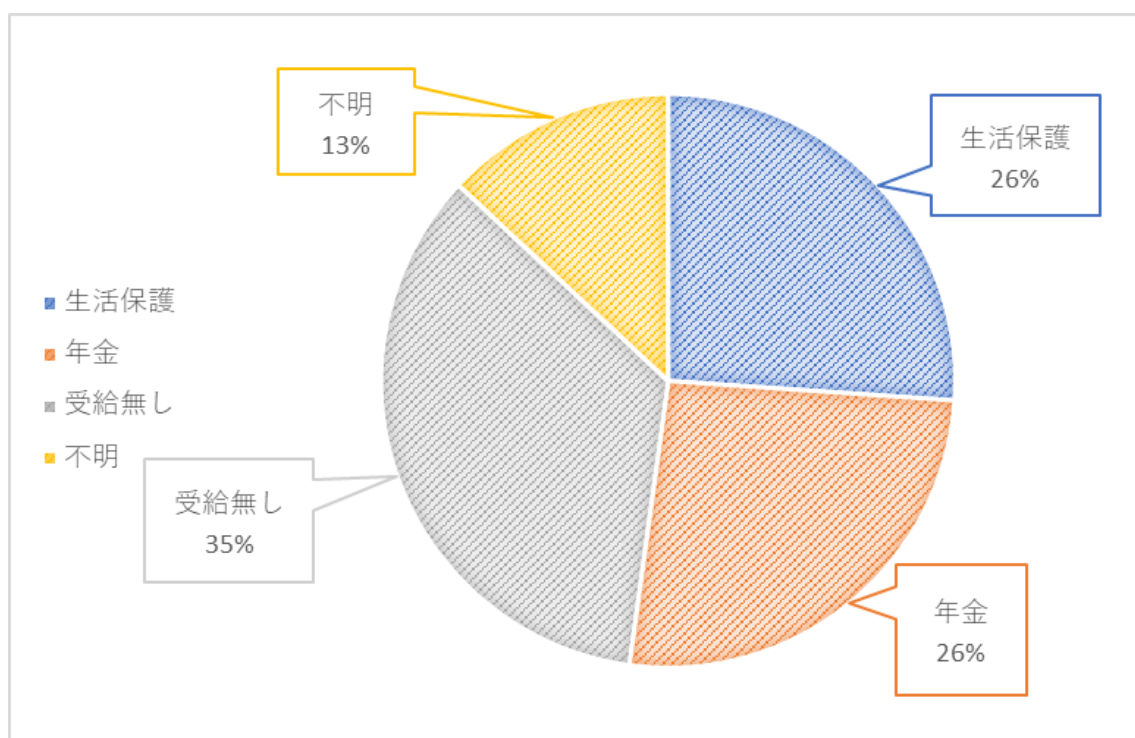
5. 多頭飼育状態に陥った原因

多頭飼育状態に陥った原因	票数	%
室内で繁殖を繰り返して増えた	24	52%
無計画にノラネコなどを保護したりする収集家タイプ (アニマルホーダー)	11	24%
その他	11	24%

その他は、「親や知人が亡くなったあと行き場のなくなった猫を引き受けた」「不妊手術をせずに自由に室内外を出入りさせており繁殖した」等でした。

6. 多頭飼い現場飼い主の社会保障等の受給状況

社会保障等の需給状況(複数回答)	票数	%
生活保護	12	26%
年金	12	26%
受給無し	16	35%
不明	6	13%



飼い主の 26%が生活保護受給者でした。生活保護担当者(ケースワーカー)との連携を強化できれば、より早く支援を実施することができます。

7. 対象猫の飼育状況

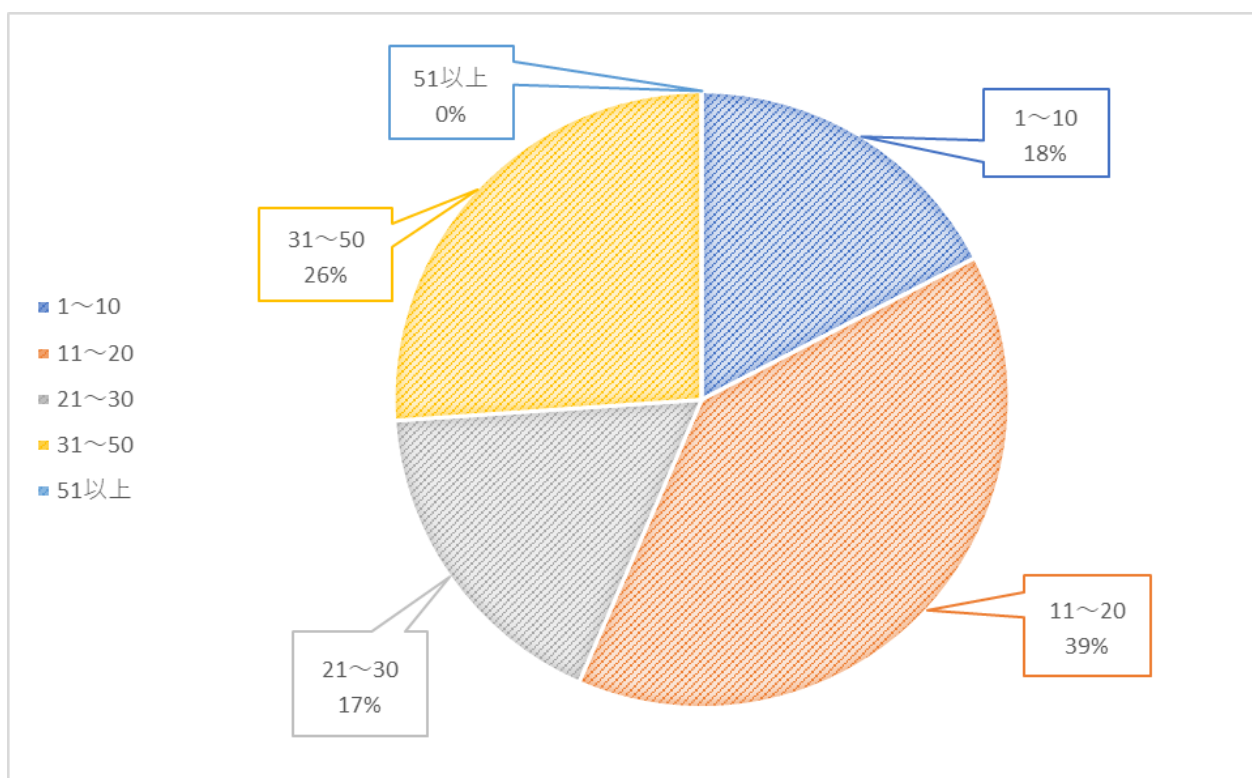
対象猫は	票数	%
完全室内飼育	22	48%
室内と外を出入りしている	19	41%
主に室外で飼育している	5	11%

8. 申請時の飼養状況

対象猫は（複数回答）	票数	%
どれもあてはまらない	13	28%
餌が十分でなく栄養不良で骨が浮き上がって見えるほど痩せている（病気の場合は獣医師の治療を受けているか。高齢の場合はそれなりの世話が出来ているか。）。	4	9%
餌を数日入れ替えず、餌が腐っていたり、固まっていたりして、食べることができない状態ではない。	1	2%
器が汚く、水入れには藻がついている。あるいは、水入れがなく、いつでも新鮮な水を飲むことができない（獣医療上制限されているときを除く）。	8	17%
長毛種の犬猫が手入れをされず、生活に支障が出るほど毛玉に覆われている。	0	0%
爪が異常に伸びたまま放置されている。	2	4%
（繋ぎっぱなしで散歩にも連れて行かず、）犬の糞が犬の周りに何日分もたまり、糞尿の悪臭がする。	1	2%
外飼いで鎖につながれるなど行動が制限され、かつ寒暑風雨雪等の厳しい天候から身を守る場所が確保できない様な状況で飼育されている。	0	0%
狭いケージに閉じ込めっぱなしである。	2	4%
飼育環境が不衛生。常時、糞尿、抜けた毛、食餌、缶詰の空やゴミがまわりにちらかっており、アンモニア臭などの悪臭がする。	30	65%
病気や怪我をしているにもかかわらず、獣医師の治療を受けさせていない。	12	26%
リードが短すぎて、身体を横たえることができない。	0	0%
首輪がきつすぎてノドが締めつけられている。	0	0%
しつけ、訓練と称するなどし、動物に対し殴る、蹴る等の暴力を与えたり、故意に動物に怪我をさせたりする。	0	0%
事故等ではなく、人為的に与えられたと思われる傷が絶えない。	0	0%

9. 手術前の猫の総数

申請時(手術前)の多頭飼い現場の猫の総数	票数	%
1～10	8	17%
11～20	18	39%
21～30	8	17%
31～50	12	26%
51～70	0	0%
71～100	0	0%
101 以上	0	0%

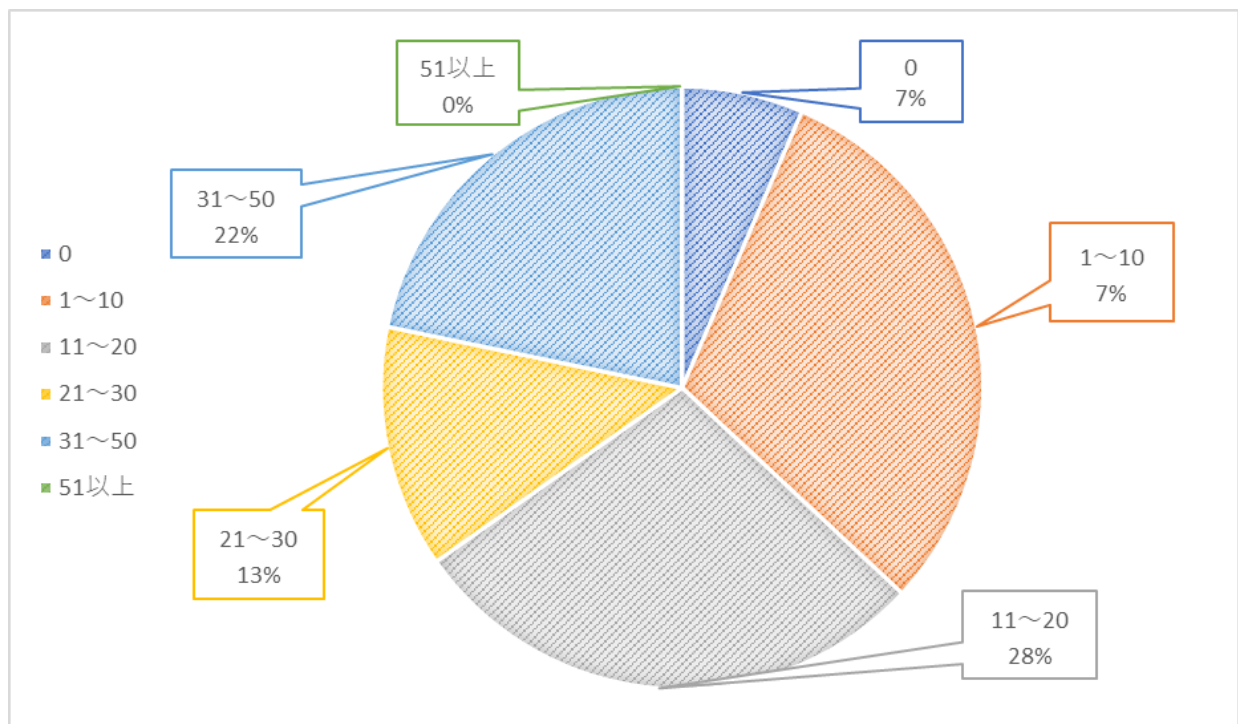


手術前に1箇所の多頭飼い現場にいた猫の数の平均は23頭でした。最も頭数が多かったケースは49頭で、2022年度は50頭を超えるケースはありませんでした。11頭～20頭という回答が多いものの、多頭飼育崩壊では、飼い主が猫の数を正確に把握していないケースが少なくありません。特に、室内外を自由に行き来させている場合や室外で飼育している場合は要注意です。

頭数把握は、支援を申請する行政にとって最も苦勞する部分であると言えます。なかには、自分が気に入っている猫や子猫を隠す飼い主もおり、飼い主の自己申告は鵜呑みにできません。第三者がくまなく室内をチェックすることが鉄則です。

10. 手術後の猫の総数

手術実施後(報告時点)の多頭飼い現場の猫の総数	票数	%
0	3	7%
1～10	14	30%
11～20	13	28%
21～30	6	13%
31～50	10	22%
51～70	0	0%
71～100	0	0%
101 以上	0	0%



手術後に1箇所の多頭飼い現場に残った猫の数の平均は18頭でした。手術後、猫が0頭となった現場が3件ありますが、すべてボランティア団体による全頭保護となっています。全頭保護は素晴らしいことではありますが、必ずしも最善の方法ではありません。飼い主の元に猫を戻すことについては批判もありますが、近年はボランティア団体の二次崩壊も大きな問題となっています。どうぶつ基金では、手術後の猫の大半をボランティア団体が保護するような場合には、必ずその団体の飼育環境を確認するよう要請しています。また、愛護センター等の行政が引き取る場合には、譲渡先探しが難航した場合も殺処分しないことを確約いただいています。

11. 不妊手術の状況

全頭不妊手術実施できましたか	票数	%
はい	33	72%
いいえ	13	28%

不妊手術を実施できなかった理由としては、対象の猫が捕獲できなかった・行方不明になった、手術実施までに子猫が生まれてしまった、幼齢・老齢であったことや健康状態から獣医師が手術中止と判断した等があげられています。

その他、実施時になって飼い主が一部の猫の手術を拒否したケースもありました。支援実施までに十分に説明して承諾を得ていても、当日になって飼い主が心変わりし、立ち入りさえ拒否されることもあります。多頭飼育崩壊の飼い主への対応は根気と忍耐が求められます。

12. 手術後の定期訪問

手術実施後 定期的に飼い主を訪問していますか	票数	%
はい	17	37%
いいえ	29	63%

定期的に訪問していると回答したのは17団体です。14団体が「月1回程度」、2団体が「3カ月に1回程度」、1団体が「月に数回」の頻度で訪問しています(支援実施後、一定の期間のみ実施分も含む)。また、訪問以外に定期的に電話で状況を確認している団体もありました。

申請を担当した部署の職員や行政と協働しているボランティア、福祉関係者(ケアマネージャーや民生委員等)等が訪問し、頭数(増えていないかどうか)、猫の健康状態や飼育環境、飼い主の生活環境などを確認しています。

約6割の団体が定期訪問をしていないと回答していますが、全頭不妊手術はあくまで解決の第一歩です。多頭飼育崩壊を二度と起こさないためにも、ボランティア等の協力のもと飼い主へのサポートを継続していただきたいと思います。

13. ピックアップコメント

【多頭飼育に陥るまでの経緯】

- もともと野良猫に餌やりをしていた。3年前、近所からの苦情をきっかけに餌をやっていた猫を室内に入れて飼い始めたが、不妊手術を行わなかったため43頭まで増えてしまった。
- 2~3年前に1頭の野良猫が物置で子猫を産んだ。親猫がいなくなってしまったため、子猫4頭に餌をあげ始めたが、不妊手術をせずに室内外を自由に行き来できるようにしていたことから頭数が増え始め、そのうち他の野良猫も室内に入ってくるようになった。

- 譲渡会で譲り受けた子猫1頭(メス)と野良猫3頭(オス含む)を室内で飼っていたが、未手術であったため頭数が増えた。当初、生まれた子猫は譲渡して増えないようにしていたが、急に生まれる数が増え、譲渡する数より多くなった。3年程度で繁殖を管理できなくなり、相談時は42頭になっていた。
- 母親が猫を以前から飼っていたが、その母親が介護施設に入所。娘(現飼い主)が母親宅を訪れ、猫に餌を与えながら里親探しを行っていたが里親は見つからず、その猫10頭(オス5頭、メス5頭)を引き取った。この時、すでに娘(現飼い主)宅には6頭(オス2頭、メス4頭)の猫がいたため、総数16頭となった。その後、2頭の猫から6頭の子猫が生まれたが、6頭全てが他の成猫に噛まれてなくなってしまった。
- 2002年から飼いはじめ、2018年頃からは30頭以上の多頭飼育状態となっている。未手術のまま放置したことで、室内での近親交配が続き、その間にも野良猫を引き入れることもあった。また、頻繁に家に入出入りする知人から「霊が見える。この猫は先祖の生まれ変わりであり、傷つけると自分に不幸が来る」と言われ、この人物に餌代の負担もしてもらっていることから不妊手術や他への相談ができずにいた。
- 近隣で猫を飼育していた知り合いがいたが、その知り合いが亡くなったことから猫の面倒を見始めた。その猫が未手術であったことから、交配して増えていった。飼い主の記憶は定かではないが、飼い始めたのは数年前からと思われる。

【手術後の対象場所や飼い主(飼い主)の状況の変化】

- 住宅外まで漏れていた糞尿の臭いも落ち着き、猫が増える心配がなくなって、飼い主も「手術をして本当に良かった」と何回も話してくれた。
- 家の中で糞尿をしてしまっていたが、餌場やトイレを別棟の物置に設置したことにより、臭いがなくなった。また、家の中のものをいたずらしてしまったりしていたが、手術したことで、性格も穏やかになった。飼い主も増える心配がなくなり安心している。
- 住居内の一斉清掃を行ったため、その状態を保とうと飼い主の意識も以前より前向きになった。飼い主本人が直接来庁し、感謝の言葉をいただいた。
- 清掃には気を使うようになり、猫の管理についても考えなおしたようである。しかし、ある時から動物愛護事務所とは連絡がつかなくなってしまった。生活保護係は関係しているので、何かあれば連絡をくれるよう頼んでいる。
- 猫は飼い主宅へすべて戻したが、以前より行政等と猫の状況を話せるようになった。

【多頭飼育崩壊に対し、どのような予防的な取り組みが有効だと思いますか】

- 動物愛護団体、動物愛護センター、社会福祉協議会などと情報共有を行い、多頭飼育崩壊に陥る前の支援が有効である。また、犬・猫を複数等飼育する場合には登録制度にする取り組みも効果的だと思われる。
- 身寄りのない独居の高齢者や生活困窮世帯での発生が多いと考えるので、福祉部門との連携を行い、ペットの飼養有無や状況などを共有し、予兆に気付けるようにすることが必要だと思った。
- 行政や近隣住民など、どのような形でも周囲との付き合いが必要であると考え。予防的な取り組みとしては、介護サービスや郵便局などと情報共有し、行政が現地確認する流れが有効的だと考える。
- 飼い猫や野良猫に対して、不妊・去勢手術をすることが当たり前という考えを更に普及する必要がある。テレビや新聞などはもちろん、子供たちへの教育の場面などでも、普及啓発をしていく必要があると思われる。

【自己評価・反省点】

- 猫について全頭手術できたこと、保健所で引き取った子猫 3 頭を新しい飼い主に譲渡することができたことは良かった。ただ、隣家からの苦情が糞尿被害からきているため、その問題に関しては継続的に見守りや指導をする必要がある。
- 多頭飼育現場の猫の頭数や飼育環境等の状況を掴むのに時間を要してしまい、支援実施までに数頭子猫が生まれてしまったのが反省点である。しかしながら、ボランティアの協力のおかげでスムーズに手術を行うことができ、そして譲渡先も複数見付き、多頭飼育現場の大きな環境改善に繋げることができた。
- このような多頭飼育救済に伴うノウハウが足りなかったことで、行政としてすべき行動が遅れてしまった。これからは、行政として、事前に地域と密着して多頭飼育をされている方、またはしそうな方へのケアは欠かさないようにしたり、不妊去勢手術への関心をより強く持ち、不幸な命を増やさないようにしたい。
- 近隣住民からの悪臭相談を受け、その日から県動物指導センターと連携し、対応を開始した。なかなか飼い主と会う機会が得られなかったが、約1か月後に全頭手術の同意が得られ、そこからはスムーズに協力してもらえた。8 頭は譲渡が完了したが、今後も新しい飼い主探し等の支援を続けていきたい。

14. 総括

- どうぶつ基金の 2022 年度の多頭飼育救済支援件数は 68 件でした。2021 年度の 84 件から 16 件減少しているものの、1 カ月に 6 件の多頭飼育救済を実施していることになり、ハイペースであることに変わりはありません。昨年からの傾向として、動物愛護部局と福祉部局が連携して解決にあたっているケースが増えています。介護や生活保護などを担当する福祉部局は日常的に飼い主と接する機会が多く、情報提供者としても欠かせない存在です。同じ意味合いからか、アンケートでは、「郵便局との連携も有効ではないか」と回答している団体が複数ありました。
- 多頭飼育崩壊を把握したきっかけ(複数回答)については、近隣住民からの相談・苦情が 18 件、ボランティアからの情報提供が 12 件、福祉関係者(福祉課、ケアマネージャー、社会福祉協議会、地域包括支援センター等)からの情報提供が 7 件、本人・家族・知人からの相談が 12 件、その他(警察からの情報提供や行政自身が発見したもの)が 2 件でした。情報収集においても、多方面との連携体制を構築、強化することが求められます。多頭飼育崩壊の予備軍を含め、早期に発見するために専用の相談窓口設置を望む声もありました。
- 多頭飼育崩壊現場の多くで「動物虐待」が発生しています。その実態を探るため、2020 年度のアンケートから申請時の飼養状況に関する質問(項目 8)を追加しました。これまで、暴力をふるう等の積極的な虐待があったと回答したケースはないものの、ネグレクトにあたる行為はほとんどのケースで確認されています。2022 年度に多頭飼育救済支援を利用した 68 団体のうち、現場の飼養状況について、虐待にあたる行為が確認されなかった＝「どれにもあてはまらない」と回答したのはわずか 10 団体でした。

必要な世話を怠る、ケガや病気の治療をせずに放置する、十分な餌や水を与えない等のネグレクトは明らかに虐待です。多頭飼育崩壊の対応にあたる際、関係者はこの事を忘れてはいけません。全頭不妊手術はあくまで解決の第一歩です。まずは犬や猫の繁殖を止め、飼い主に考えて行動する時間を与え、適切な指導によって虐待が発生するような飼育環境を改善する、これがゴールです。そのためには定期訪問が欠かせませんが、定期訪問を実施している行政は 37%に留まっています。
- 2022 年度多頭飼育救済支援における当事者情報を整理すると以下のようになります。
 - <性別>男性:24 名(35%)、女性 44 名(65%)
 - <年齢層>40 代:5 名、50 代:16 名、60 代:17 名、70 代:17 名、80 代:12 名、90 代:1 名
 - <世帯状況>単身世帯:18 件(26%)、一般世帯:50 件(74%)高齢世帯における多頭飼育崩壊はやはり多く、どうぶつ基金が支援した 68 件のうち約 7 割の飼い主が 60 代以上でした。また、一般世帯での発生が 7 割を超えている点も注目です。多頭飼育崩壊の解決にあたって、不仲や無関心等によって家族の協力が得られないケースも少なくありません。飼い主の孤立は状況を悪化させます。だからこそ、飼い主には福祉面をはじめとする行政のサポートやボランティア団体・近隣住民との繋がりが重要です。

【参考:2022 年度に多頭飼育救済を申請し、事業を完了した行政名(順不同)】

愛知県安城市	愛知県一宮保健所(2 件)
茨城県かすみがうら市(2 件)	茨城県下妻市
茨城県常総市	茨城県神栖市(2 件)
茨城県石岡市(3 件)	茨城県太子町
沖縄県糸満市	宮崎県三股町
宮崎県日南市	宮城県大崎保健所
群馬県安中市	群馬県伊勢崎市(2 件)
群馬県吉岡町(2 件)	群馬県渋川市
群馬県沼田市(2 件)	群馬県前橋市
群馬県大泉町	群馬県藤岡市(2 件)
香川県観音寺市	埼玉県所沢市(2 件)
埼玉県さいたま市	埼玉県東松山市(2 件)
鹿児島県いちき串木野市	鹿児島県さつま町(3 件)
鹿児島県阿久根市	鹿児島県鹿児島市(4 件)
鹿児島県日置市(4 件)	青森県青森市
大阪府松原市(2 件)	長野県阿智村
長野県坂城町	長野県山ノ内町
長野県木島平村	東京都中野区
東京都東大和市	富山県富山市(2 件)
福岡県久留米市	福島県白河市
兵庫県尼崎市(2 件)	北海道ひだか町(2 件)
北海道岩見沢市	北海道共和町
北海道小樽市	